

2

これまでの取組事例

ここでは、第1部「3 当市の文化芸術に関するこれまでの取組など」の「(3) 「文化のまちづくりビジョン」に基づく取組」に掲載した事業の具体的な事例を紹介します。

(1) 多文化都市八戸推進事業補助金

平成20年度から、市内を活動拠点に、多種多様な分野で活発に繰り広げられている市民の特色ある文化芸術活動を支援しています。支援対象となるのは、先駆的・実験的な事業内容で、対象者を限定せず広く市民が参加し、鑑賞機会が得られるもので、地域活力の創出が期待できるものとしています。（同一の事業に対しては補助は最大3回までとしています。）

平成20（2008）年度から令和2（2020年）までの13年間で41件の活動に補助金（325万7千円）を交付してきました。参加された方の人数は、約1万3千人にのびります。また、補助金の活用にあたり、文化芸術活動者が従前にはなかった発想で取組を考えるきっかけとなり、その結果、新しい表現方法の確立、他分野との連携や新規の参加層の獲得につながり、また、参加した市民が文化芸術活動に触れ、親しむことができる環境をつくることにつながりました。

主な実施例としては、次のものが挙げられます。

	実 施 例
平成20（2008）年	環境問題をテーマに、クラシックバレエ、モダンダンスなど異なるジャンルの洋舞で構成し、自然破壊についての警告を創作舞踊で表現した舞台作品。
平成22（2010）年	ブラジル音楽のライブ、柔術の鑑賞・体験、ブラジル貧民街の母親たちの手作りぬいぐるみの販売などを通じて文化の多様性を体感するイベント。
平成24（2012）年 平成23（2011）年	ちびっこサンバ隊の披露、写真展示、ライブコンサート、青空市を、南郷文化ホール、ホール前広場、南郷図書館などで実施し、ホール周辺の一体的な使い方や図書館の新しい使い方を提案するイベント。
平成26（2014）年	義経北方伝説をテーマに、民俗芸能・方言を活かした朗読・僧侶を招聘しての講話・アコースティックライブなどバラエティー豊かな演目により表現。
令和元（2019）年 平成30（2018）年 平成29（2017）年	八戸港と姉妹港のフィリピン・マニラからアーティストを招聘し、個人宅にレジデンスしながら市内のリサーチや作品制作などの芸術活動を通じて、市民、学生、外国人住民との文化交流を行う企画。

(2) 八戸ポータルミュージアム（はっち）

①アーティスト・イン・レジデンス（AIR事業）

八戸ポータルミュージアム（以下、「はっち」という。）では、開館1年前の平成22年（2010）年から、様々なアートプログラムを展開していますが、当時、建物内にレジデンス機能を有する施設は全国的にも珍しく、はっちの活動を象徴するもののひとつであると認識しています。



はっちのAIR事業は、アーティストやクリエイターを招聘や公募により招致し、地域資源を対象とし、文化芸術の力により新たな価値を加えその魅力を再認識する機会とすることを目的に実施しています。

また、実施あたっては、アーティストと市民が交流し共創することに主眼をおき、さらには、制作の場をオープンにすることで来館者にも可視化され、プロジェクトによっては来館者も参加できる形態をとっていることが特徴といえます。

はっちのアートプログラムには、これまでに述べ5万3千人を超える方が参加しています。（「横丁オンリーユーシアター」、「DASHIJIN」を除く。）

また、アーティストの創造力により八戸の地域資源の新たな魅力が創出され、はっちを介してアーティストと市民が交流する機会を生み出す効果があったほか、事業完了後も、その活動がはっちや市民に受け継がれたものもありました。

主な実施例としては、次のものが挙げられます。

	実施例
平成23（2011）年	八戸が発祥の「デコトラ」をテーマに獅子舞のような作品「デコトラ装束」を制作し、完成した装束を身に着けて市民ダンサーズが市内各所で披露。
平成24（2012）年	伝統武芸「加賀美流騎馬打毬」に着目し、当市が中学校口ボコン発祥地であることにも着想した「伝統芸能×ロボコン」「はっち流騎馬打毬」を実施。
平成25（2013）年	自転車に乗って八戸の魅力を探し出し、6つのコースを作成。市民とともに自転車に乗ってコースを巡り、八戸を新・珍発見する企画。また、はっち初の全国公募の企画。
平成26（2014）年	八戸の沿岸部を舞台にしたアニメーション作品「はちのへごっこ『ハマネコ』」を制作。音楽、声優には市民や八戸縁の人々が多数関わった。

	実 施 例
平成27（2015）年	「八戸ロマン時空探検隊」（縄文をテーマに公募し採択された企画）。中心市街地の空き店舗を「基地」に、縄文を現代の目線から楽しく追っていくプロジェクト。翌年度には、是川縄文館と連携し、「是川時空探検祭」が開催。はっちのアウトリーチの成功事例となる。
平成28（2016）年	「堤にもどる」（スケートをテーマに公募し採択された企画）。氷都八戸の歴史を掘り起こし、旧柏崎小学校跡地に八戸スケート大会発祥の“ため池”「勘太郎堤」（10分の1サイズ）を制作し、市民の当時のスケートの思い出を収集・展示。

②酔っ払いに愛を「横丁オンリーユースシアター」

横丁オンリーユースシアターは、はっち開館前の平成20（2008）年から実施しており、中心市街地にある8つの横丁を舞台に「はっちと横丁関係者がともに作り上げるアートプロジェクト」として開催しています。

当初、出演者は全て招聘でしたが、回を重ねるごとに完全公募であったり一部公募にするなどアーティストの選定にも創意工夫をし、新しいジャンル・作風を取り入れるなど、毎年、経験値をあげながら取り組んでいます。

また、参加（鑑賞）者は、飲み物片手に、様々なパフォーマンスを観て楽しむイベントとなっており、これまでに参加したアーティストは述べ103組、参加（鑑賞）者は、述べ1万1千人余りとなっています。

このプロジェクトを通して、まちとのコミュニケーションの流れが生まれ、また、これまでアートに触れる機会が少なかった横丁の人が事業を通して自らアートのことを語るなど、アーティストの存在がまちの印象や風景のみならず、関わる人やまちの人の意識にも大きな変化をもたらし、現在は秋の横丁の風物詩として、商店街や市民の方々に、横丁文化を知ってもらう機会となっています。



③DASHIJINプロジェクト



はっちのAIR事業では初となる5年間（平成28(2016)年度～令和2（2020）年度）の長期プロジェクトで、八戸三社大祭をテーマに、祭りを作る人・支える人・かだる（参加する）人、また、神事にも焦点を当てて、取り組みました。

山車の独自の造形美、世代や立場を超えてつながる精神性など、一人ひとりの祭りへの想いが結集して祭

りが成立し存在するその意義を市民が体感し、祭り継承への一步を踏み出すことを目的に実施しました。

5年間で、全27組の山車組関係者をはじめ、アーティスト6組、参加者は約3万人となっています。

主な実施例としては、次のものが挙げられます。

実 施 例

三社大祭山車組リサーチ。27組全ての山車組を対象に、制作時から祭り本番まで足を運び現状把握。

市内に暮らす人々の生活の中に存在する物語やエピソード「八戸の宝」を88個取材収集し、成果品の冊子は市内小・中学校、地区公民館等へ配架。

アーティストがガイド役になり「山車づくり現場の見学ツアー」「山車造形物制作ワークショップ」を実施。

子どもたちが、仮想テレビ局のカメラマンとリポーターに扮して山車制作現場を取材し、みんなに教えたオリジナル番組を制作。

三社大祭を将来へ引き継ぐための教育現場で活用できる祭り教育プログラムキットを制作。キットの作成にあたり、市内4つの小学校で授業を実施。

祭り本番で使用する山車装飾を、市民も参加して制作。

(3) 南郷アートプロジェクト

当市南郷地区は人口5,300人ほどの過疎高齢地域でありながら、平成2（1990）年から毎夏にジャズフェスティバルを開催しているほか、えんぶりや神楽などの民俗芸能があるなど、地域のなかに身体表現が自然に溶け込んでいる地域です。南郷アートプロジェクトは「アート」のもつ創造的な視点から地域資源を活用し、地域内外に魅力を発信するアートプロジェクトを展開することで、



「島守の、うずうずツアーなんだこりゃ！」
平成23（2011）年

地域コミュニティの活性化や交流人口の増加に結び付けるとともに、南郷地域をはじめ当市の更なる魅力を創出することを目的に平成23（2011）年にスタートしました。

これまで、南郷の地域コミュニティに入り込む企画を実施し、積極的に南郷地域で生活する人々に協力（参加）いただくことで、南郷文化ホールへの集客が促進され、また、同プロジェクトで出会った人同士が繋がり、「すまもり中世の田んぼクラブ」が結成されたり、移住者やUターン者のネットワークも形成されました。



「なんごう小さな芸術祭」
平成30（2018）年

さらに、南郷文化ホールの稼働率の増加もみられ、より多くの人々がホールを利用し、文化芸術に親しむ環境を作ることにつながったことや、芸能、郷土史、食、農耕文化、場所等、多様な地域資源を有効活用した事業を展開し、えんぶり組の伝承や、出稼ぎくじら漁の歴史等を作品にしたことで、知られていなかった南郷地区の魅力を掘り起こし、次代に伝える機会を創出しました。

10年間にわたって行われたこのプロジェクトには、49組のアーティストが関わり、参加したあるいは入場した市民は約2万7千人となりました。

主な実施例として、次のものが挙げられます。

	実 施 例
ダンス公演 DANCE×JAZZ 平成23（2011）～27 （2015）年 平成29（2017）年 令和2（2020）年	南郷の地域資源に着目し、市民が関わり創作したパフォーマンス作品を南郷文化ホールにて上演。令和2年度では題材として、南郷サマージャズフェスティバルを取り上げ、地域住民から聞き取ったエピソードのエッセンスを盛り込みながら、コンテンポラリーダンスとジャズの生演奏によるダンス作品を上演した。
映画をつくろう！ 平成25（2013）～27 （2015）年	学校に通う子どもたちや、地域の人々がダンサーとして登場し、地域の歴史や物語を題材としたダンス映画を制作した。
おじょう藤九郎 平成26（2014）年	当市に伝わる民俗芸能の「えんぶり」を、舞踏手が習い、その振りやその本質を採集し、再構築して舞踏バージョンのえんぶりを創作し、上演した。
なんごうカルタ 平成28（2016）～30 （2018）年	地域の方（特に高齢者）から、一般には知られていない、集落や個人にまつわる物語や、地域に残る知恵や技に関する話を収集し、カルタとして編纂。カルタが完成するまでの過程で得た「物語」は写真と文章でつづり、ウェブや紙媒体で発信するほか、完成したカルタを用いて、展示や朗読会などを開催。
くじら村 平成30（2018）年	南郷の捕鯨漁をテーマにした新作演劇作品を創作、上演。当市で演劇活動を行う市民を中心に公募し、オーディションで出演者を決定した。
なんごう小さな芸術祭 平成30（2018）年	南郷地域を舞台にアーティストと地域の方々が一緒になり、公演、展示、ワークショップ等、南郷アートプロジェクト8年間の集大成として実施。これまで関わったアーティストや企画をリニューアルして再現するなど、多岐にわたるプログラムを行い、バスツアーも企画した。

(4) 八戸工場大学

八戸工場大学は、八戸の「工場」を文化資源と捉え、工場の新たな魅力を創出し、市のブランドイメージを高め、市内外に発信するプロジェクトで、市民とアーティストと工場が協働で実施する「市民参加型」のアートプロジェクトを運営することで、各々のシビックプライドの醸成や、工場の地域社会貢献への波及効果を生むことを目指して、平成25（2013）年から取組を始めました。

令和2（2020）年度までに、8つの企業と協力してプロジェクトを行い、参加（入場）した市民は約4千人となりました。参加した市民や企業から、「八戸の魅力を再認識できた」「従業員の家族に自分の工場のことを知ってもらえる良い機会だった」「自分なりに気にかけて、地元を楽しもうと思うようになった」という声があり、地域の新たな魅力創出と、市民や工場の誇りの醸成に繋がりました。

さらに、活動を重ねることで受講生同士の積極的交流が生まれ、その結果事務局、受講生がチームとしてのアートプロジェクトの運営にあたることができ、さらに広く一般の方の関心の輪を広げることに繋がり、また、企業による文化芸術への理解や支援が地域貢献にも繋がり、関係者自らが市内外へ発信する意欲が形成できました。

主な実施例は、次のものとなります。



「さよなら、ぼくらの大煙突」
平成30（2018）年



「虹色の狼煙」平成28（2016）年

	実 施 例
八戸工場大学文化祭 「工場サイコウ」 平成25（2013）年	八戸の工場をテーマにし、アーティストと参加した市民がそれぞれの作品（八戸の工業団地をモチーフにした建築模型や工場をモチーフにしたグッズ等）を持ち寄り、展示を行った。
-162℃の炎を見よう 平成26（2014）年	八戸LNGターミナルの稼働開始に合わせ、JXエルエヌジー・サービスと協働し、鉄塔から吹き上がる炎を愛でる作品の展示や催しを貿易センタービル（当時）で開催。
虹色の狼煙 平成28（2016）年	太平洋金属と連携し、工場から出る煙（水蒸気）を狼煙に見立て、七色に染め上げてナレーションと音楽で演出したものを皆で鑑賞するプロジェクトを開催。
八戸・工場アート展 平成29（2017）年	「わたしたちが惹かれる工場の魅力を、アートを通じて探る。」をコンセプトに、工場をテーマとした作品を制作している作家・アーティスト、受講生が撮影した八戸の工場をモチーフとした写真の展覧会を開催した。
さよなら、ぼくらの 大煙突 平成30（2018）年	東北電力八戸火力発電所と協働し、役目を終えて解体予定の大煙突を参加者がエアロバイクで発電した電気で光を灯すライティングショーを実施。

これまでに取組の成果を踏まえ、検証し、更なる取組を進めていきます。

- ・支援対象者拡大の検討（市外で活動している当市出身者など）
- ・支援枠拡大の検討（中規模事業への支援など）
- ・複数年での支援の検討
- ・事業終了後の発展性や深化につなげる関わり方の検討
- ・イベントに参加した市民を他の文化芸術プログラムへと誘う仕組みの構築